

コラム 荘園遺跡と文化的景観 —パネル展開催から考えたこと—

平成25年(2013)10月17日、泉佐野市所在の史跡日根荘遺跡に土丸・雨山城跡が追加指定され、日根荘大木の農村景観が重要文化的景観に選定された。

日根荘遺跡 日根荘(ひねのしょう)は鎌倉時代から戦国時代にかけて現在の泉佐野市域に所在した九条家の荘園で、14世紀初頭に描かれた「日根野村絵図」や領主九条政基が文亀元年(1501)3月から永正元年(1504)12月まで4年間の日根荘滞在時に記した『政基公旅引付』などの九条家文書をはじめ日根荘関連資料が多数伝わっている。また史料に登場する場所や景観が現地に残されていることでも知られている。

荘園遺跡と文化的景観としての価値 史跡日根荘遺跡は、日根野村絵図や政基公旅引付等に登場する寺社堂・ため池、水路等14か所が平成10年に指定、その後長福寺跡、土丸・雨山城跡の追加指定により、現在、16か所が日根野地区、大木地区、土丸地区、熊取町の広範囲に点在している。「史跡日根荘遺跡保存管理計画」(2002年3月)では、日根荘遺跡の本質的な価値について①社寺境内地に残された歴史的建物②ため池、用水路等の地上遺構および地形③社寺跡等の埋蔵文化財④それを取り巻く周辺景観にあると位置づけ、「長い歴史の中で人々が自然とかかわり合いながら刻んできた、歴史的・文化的価値の全てを遺産として評価する文化的景観としての価値を有している。」として、日根荘遺跡は単に過去の(止まってしまった)遺跡でなく、今に生きる証拠でもあり、価値を維持する上で現在の暮らしや生業を続けることが重要であるとした。もっとも史跡指定地である以上、指定地で行われる日常の暮らしや生業での必要な行為が、現状変更等の対応が必要な条件となることは不可避であり、また史跡指定地周辺で起こる景観変化に直接的に働きかけることは困難であった。

一方、平成17年度から日根荘入山田村の範囲を対象として文化的景観保護の取組に着手し、平成25年10月大木地区が重要文化的景観日根荘大木の農村景観として選定された。大木地区では、日根荘由来の土地利用等の上に近代以降の大都市近郊農村の変化に富む生業や、新しくも重厚さを失わない家屋群が重層し景観を構成している。こうした環境を踏まえ、保存活用計画では大木地区が和泉山脈の山間盆地として良好な自然環境のもと、中世に遡る九条家の荘園遺跡に起源を持つ農耕・居住に関する良好な文化的景観であることと、近世から近代にかけて緩やかに進化を遂げた泉南地方の農耕・居住の基盤的な土地利用形態を示す文化的景観であることを評価した。日常的に「日根荘」について意識されることは少ないが、地形や水系などに規定される土地利用の在り方や、史跡指定地である社寺堂や地名、集落のまとまりなど日根荘由来のものが地域の根幹部分として受け継がれ、一方で時代の変化に合わせて、暮らしや生業の変化に対応できる部分も併せ持つことで、両者の均衡により文化的景観として受け継がれてきたのである。そこで文化的景観保存活用計画では、変化してきた部

分、例えば新しく屋根の意匠や間取り等泉南地域に共通してみられる特徴や屋敷地や農地を構成する川原石の石積み等を構成要素として位置づけた。将来の変化に対して周囲と調和するよう配慮を要請し、史跡と文化的景観の長所を活かすことで、中世から近現代が共存する「日根荘の里」大木地区を保全しようと考えたのである。

価値共有 しかしながら日根荘遺跡の価値が、対象地域住民や市民、さらには市役所内部での共有となると話は別。一般のアンケートでも慈恵院多宝塔(国宝)や日根神社等単体の文化財の認知は高いが史跡日根荘遺跡や文化的景観の認知は低く、史跡日根荘遺跡指定地は重要視されてもその周辺への関心は低かった。日根荘遺跡の保護には史跡と文化的景観の両輪が不可欠であり、遠く離れた文化財ではなく、身近な地域資産としてその価値を共有して行くためには、日根荘を知ってもらうこと。史跡指定から15年経った今も、かわらず至上命題であった。

文化的景観のパネル展 平成26年1月から3月まで、文化的景観のパネル展やシンポジウム等日根荘遺跡関連の普及広報事業を集中展開した。パネル展「ふるさとの風景を受け継ぐ」は大府教育委員会や大府立弥生文化博物館の協力により弥生文化博物館エントランスホールと本市の歴史館いずみさので開催した。

史跡や文化的景観は現地に行くことが一番。しかし史跡指定地や大木地区を直接訪れて実感するのは難易度が高い。日根荘の頃に盆の風流や芸能、雨乞が行われた火走神社、村の集会所であった寺堂などは比較的わかりやすいが、道端の農地が九条政基の滞在了長福寺跡であったり、農地や道路わきの溝が中世からの水路であったり、日常の風景の中にあちこちに「日根荘の里」の見どころが潜んでいるのである。

パネル展では、第一に文化的景観や日根荘遺跡・大木地区を知ってもらうことを目標とした。重要文化的景観は大木地区が大府初選定。最もなじみが薄い文化財なので、先行する選定地のご協力写真をお借りした。選定地を既知っている人も多く効果が高かった。日根荘遺跡をテーマとした展示は市外で初。歴史館いずみさのでは、中世荘園に生きる人びとをテーマとした常設展示や荘園絵図や政基公旅引付をテーマとした特別展等を開催している。しかし今回のパネル展は文化的景観を中心に据え、その主役は日常の大木の風景。日根荘遺跡や大木地区の基本的な解説はするものの、可能な限り風景写真を多くし、さらに大木小学校の児童と共に取り組んできた自然観察や景観カルタづくりの様子、地域の伝承を紹介するパネルなども加えた。また弥生博スタッフのアイデアで案内チラシに市内在住画家の大木スケッチを採用するなどした。観覧者からは、「建物屋根の意匠(ツノ・キバナなど)がご自宅にもある」とか、「犬鳴山へ行ったことがある」等、大木地区に親しみを抱いたというご意見や現地へ足を運んでみたいというご意見が多く、目標に概ね満足得られる結果となった。シンポジウム・フォーラム シンポジウム



歴史館でのパネル展示。常設展示や大木地区関係資料展示もあわせて行った。



パネル展フォーラム



弥生博でのミュージアムトーク

では、金田章裕氏、本中眞氏、神吉紀世子氏からこれまでの史跡日根荘遺跡や大木地区の取組を振り返り、その価値・魅力等の講演があり、本市ゆかりのフリーアナウンサー山本浩之氏を交え、身近な地域資産である、日根荘遺跡と文化的景観の保存活用を地域の活性化につなげていこうといった話があった。パネル展フォーラムでは、日根荘遺跡や大木地区の取組、杉本宏氏から宇治市の文化的景観の取組の報告、神吉紀世子氏から、まちづくり視点で文化的景観を活かす取組等の講演があった。参加者からは文化的景観が従来の文化財の視点とは異なること、日根荘遺跡への関心と本市のまちづくりへ資する今後の展開への期待などの意見があった。

日根荘遺跡をめぐる取組は、文化財の保護から、まちづくり視点での取組へと新たな段階を迎えている。本市では前述の普及事業と並行して歴史文化プロモーション事業として、日根荘関連の総合的な広報事業を展開している。何よりもまず日根荘を知ってもらうこと、その取組を続けていくことが大切であると実感している。

(東原 直明/泉佐野市教育委員会教育総務課)

パネル展：平成26年1月9日～22日(歴史館)、2月4日～3月1日(弥生博)フォーラム：3月1日(弥生博)シンポジウム「日根荘を語る」2月23日(エブノ泉の森ホール)